
推敲 1

TOLA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

推敲1

【コード】

N3383Q

【作者名】

TOLA

【あらすじ】

タイトルのとおり推敲です。

推考をしながら推敲とかちょっとシャレっ気をしたものです。きつと何作か続けます。

あまり長くは無いです。

（前書き）

今回この作品にアクセスしていただきましてありがとうございます。早速ですが、あまり気持ちを入れ込まずに読んでください。

考え込むことは個人的に好きなのですが、考え過ぎはよくないとも思います。

つまりはそんな考え込むことをそのまま話にしてみようと思いましたが。

でも、きっとファンタジーにしたくなると思います。

したくなってはたくなって出来たら良いのですが・・・

それはカズキ君（登場人物）と相談しないといけません。

本屋に行けばまあ見かけるであろう小説。

作者がいて、読者がいて、それなりの商業材料？ になったり。

TVアニメーションやTVドラマ、映画などの画像に置き換えられ、読者は多方面から小説を楽しむことができるようになった。

さて、世間一般の人が「普通だよな」と口を揃えるであろう普通っプリの主人公、名前をカズキと言うこの成人男性。

仕事は本屋の店員、サラリーマンではなく本屋の店員、店長でも無い本屋の店員。

背は高いというわけではない、体つきも悪くは無く良いわけでもない、容姿や存在感もそれなりに悪くは無い。強いて特徴を挙げるなら・・・メガネを掛けていることと、今現在その本屋の制服らしきエプロンを着ている点ぐらいか。

この本屋さん、町の大通りから脇道に入って、高速道路に雨よけをされる日陰のポジションに存在している。

うむ、大きなチェーン店や有名な　のような本屋ではなく、それでも本店はこの国の首都に布陣しさらに支店が各所に・・・両手足で数えるくらいは存在する本屋さんである。

その支店の一つにカズキは朝から夕方過ぎまでを固定している。

定休日は毎週水曜日、しかしそれはこの支店の店長が決めた曜日で他の支店は別の曜日だったりするのである。

さて、カズキ。店の窓からレジが見えるがそこに彼の姿は無い。

今は本棚の掃除をしているらしい、背中がチラチラと見え隠れしている。

今日は水曜日、そう定休日である水曜日である。なるほど、入り口

のドアには定休日の看板が右側を3度ほど傾けて掛かっている。しかし、中では忙しい動きを見せたり見せなかつたりの店員カズキの背中。

今こちら向いた。入り口をちらりと見やって、棚の影に姿を消した。・・・ふむ、奥に行ってしまったようだ。

カズキは倉庫に入り、箱の中にきれいに揃えられた品物をガサッとやや雑な感じに持ち上げると、両足でカニ歩きのような動きを見せながら体の前にぶら下げた品物を左右に振りつつ、店の中に戻ってきた。

ガツッ。っと角が本棚の隅に当たってもまあ気にしてないよねあの顔は。

品物、現在下の辺りに揃えられてた二、三冊が少し凹んでいるようだ。

誰か！彼にもう少し丁寧な作業をするように言ってあげて！

本日定休日である。うむ、店に居るのは売り場準備に来ているカズキただ一人。

よし、今カズキの足の間で規則正しくない振り運動をしている重さ約4kgの品物よ。

ガンバレッ！未来はある！

作業を終えたのか腰に手を当てて軽く全身をひねるカズキ、手をブラブラとさせているがあまり激しく振れないようだ。

なぜなら狭い、一人一人が少し注意しながら進めるような通路、さらに自分の背の高さはあるつかという本棚の壁、壁には本の背表紙が『さあ、読め！』と言わんばかりにせり出しているようでない。

たまにせり出している本は、カズキの手によってストツと奥に戻される。

カズキ、手を軽く組み、頭の上にぐぐうーつと持ち上げた。

「んーっ、たあ・・・」

腕がだらんと下がる、そして見事に壁に埋まっていたはずの本に、取っ掛かりの少ない本に引っかかり、壁がごっそりと削られた。

「うあっつー!」

瞬時に受け止めようと動くのは反射神経的に悪くないことの証明だ。例によってカズキも膝を落とし、右手と左手、さらに太もも辺りまで使って崩れた表面の残骸を受け止め・・・まあ、こっそり5冊ほど谷底にポチャンしたわけだが。

「とつと」と太ももで壁に押し付けた本の様子を目で追うカズキ、だがっ!

次の瞬間

「あ、あ~~~~、あ”~~~~~・・・はあー・・・」

カズキ、よくやった。お前の頑張りは見事に無駄に終わった。

かろつじてカズキの体に引っかかった本は、砂のように手の隙間を抜けカズキのやる気を奪っていった。

カズキは心底ウンザリした顔になったなあ。はたから見ても分かるくらいにオーラが寂しさを増したようだ。

しかしそこは店員、見事な気持ちの切り替えしで落とした本を取り上げた。

一冊、二冊、三冊と彼の手に本が集まってゆく。

四冊めを取り上げ、彼は本棚にそれらを差し込んでゆく。

収め終わると拾う、そしてまた収める。
ため息一つ出す前にささつと本をしまつところなんてなかなかだと
思わないか？

さて、かれは先ほど運んでいた荷物を持ち直した。
奥にある作業台の上に置き、袋の中身を物色する。

ゴソゴソ

彼は 袋の中 から 本を取り出した！

まさにオタカラをゲット！と言わんばかりに高らかと両手で持ち
上げるなんてことは絶対しない。

右手で取り、作業台に置く。

次の一冊を取り、作業台に置く。

次の一冊を取り、先ほどの本の上に重ねて置く。

次の一冊を取り、ちよつと離れたところに置く。

作業が続きます。

もくもくと取り出し、もくもくと置く。

作業が終わつたようです

空になつた袋をシューつと両手で上下に細い形にさせる。

そしてくるつと一巻きして作業台の横に吊るしている大きな袋（中
に同じように巻かれた袋が入っている）のなかに放り込んだ。

チラつと腕時計を見たカズキ。

時間は昼を少し過ぎたくらいである。

カズキ、お昼の時間なのである。

昼食は店の外で食べるのか？それともお弁当なのか？

カズキはエプロンの紐を緩め、奥へと消えてゆく。

奥には従業員用の事務所があったりするんだろっな、その中には専用ロッカーがあったりして案内壁際に大きな鏡があったりして、カズキはそれで身だしなみをちょちょっと確認して自分のロッカーを開いた。

そう・・・彼はロッカーの中にちょっと自分の意図していないものあることに気づくであろう。

彼のカバン、黒っぽい斜めがけのショルダーバッグなのだが。

カズキはそのカバンを手に取るうとした瞬間・・・

・・・彼は、ピクツと手を止めた。

カズキのメガネがキラリと光る、その中の彼の目の表情が消える。

「・・・サイフ・・・忘れたんだっただ・・・」

彼はカバンを見て思い出したのだ。

自分は今日、いつもと違うカバンで来たことに、そして、中身がいっつもと違うことに。

サイフが無い。

サイフが無いとはつまり、彼の持ち物であるサイフが今、彼の手元から離れており、財布の中にあつた今日の食費を含む五千円が無いということなのだ。

ゴクリ・・・

つばを飲む

そして、カズキの思考はめまぐるしく加速してゆく。

どうする、財布がない・・・

お昼ごはん・・・買えない・・・
取りに帰るか・・・いや・・・まだ本が片付いてない・・・
今日はあまり仕事無だからささっと作業済ませて帰るか・・・

この間3秒。

カズキのとつた行動、それは。

ロッカーを閉じ、脱ぎかけていたエプロンをもう一度付け直した。
そして事務所を後にして戻ってきたりするはずなのだが・・・

奥から帰ってきたカズキの手には小さな包みが、そして、もう片方の手には水筒が！

お弁当だったのか！ カズキ！ お弁当か！

作業台の上でお弁当の包みを広げた彼は中身のおにぎりをひとつかぶり、ちよつとモグモグしてもうひとつかぶり。

おにぎりはカズキの手に収まるちよつどいい大きさだ。
ラップに包まれている、ちよつと青緑がかつた黒い色のおいしそう
な海苔に包まれている、おにぎりの中にはきつと梅干が入っている
に違いない。

彼のことだ、大きな梅干を丸ごと放り込みそれを炊き立ての白ご飯
に包み込んで、海苔を巻いたのだ。

さあ、もうひとつかぶりもすれば中身とご対面だ。
薄い塩味の利いたお米に守られている大きな赤い宝石、その酸味に
ある者は口を尖らせ、ある者は目を閉じ、口いっぱいに広がる新鮮
な刺激に酔いしれるのだ。

カズキは思ったのだ、今日はおにぎりがいいと。

そして、中身は梅干にしよう。

カズキのそしてカズキの仕事場の本屋の運命は彼の次の行動に大きく左右されてゆくのである。

そして、大きな転機が訪れ、選択を迫られ、カズキは考えるのだ。

しかし、こんなにも・・・私の推敲が外れてしまっているとは・・・まだまだ思うように未来を構築できていないようだ。

もう少し彼を見つめてみることにする。

(後書き)

お疲れ様でした。

次の機会にもし続きを読んでもくださるときはよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3383q/>

推敲 1

2011年1月26日13時10分発行